

答：谷口

小説家を志す前にめざしていた職業についてということですが、私の記憶では画家になりたかったらしいです。祖父が狩野元信の絵を見せてくれて、画家になろうと思ったと後年書いております。したがって川端は最初から美術への関心のある環境で生まれ育ったということが言えます。ただ、今日お話ししたように、そういう関心が最初は外面的な刺激であったのに対して戦後はより内面的なものになっていく、つまり戦中の危機感の中で古美術に直接にふれた体験をきっかけとして古美術への感動が作家の中を濾過して作品の世界に関わってくる、そういう過程を私は考えております。

## 司会者のまとめ

秋山 光文

この分科会では、文学作品が如何に造形化されたかを論じるのではなく、造形作品が如何に文学作品に取り込まれているか、美術作品がイメージソースとして如何に文学作品に刺激を与えているかを解析するという観点から、文学作品の中に現れた造形美術の諸相について、それぞれ異なった視点から中古・近世・近代に見られる作例を取り上げ、3人の研究者が知見を発表した。

劉卿美氏の発表「屏風歌とその周辺、絵画との関わり」は、本来画中の色紙形に書き込まれていた屏風歌を手がかりに、和歌制作の下地となった屏風絵を解析しようとする試みであった。

9世紀後期頃から日本の景物を主題とするいわゆる「やまと絵」の成立に伴い、「名所絵」「月次絵」「四季絵」など、多様な画題によるやまと絵屏風が盛んに宮廷や貴族の邸宅で用いられた。同時にこうした画題の風情を歌に詠じ合って興じ、それぞれの画中の色紙形に能筆をもって書き込む形式の屏風歌もまた数多く作られることになった。

現存するやまと絵屏風の遺品は皆無に等しいが、遺された屏風歌、障子歌を手がかりとして、当時のやまと絵の形式や主題、とりわけ画面に描き込まれたさまざまなモチーフを知ることができ、日本的な画題の発生と展開のあとをたどることは従来から指摘されてきた。劉氏は、「源氏物語絵」や「紫式部日記絵」などの絵画資料における作例を提示しながら、平安時代における屏風の使用例を実際に示す一方で、時代は若干下るがやまと絵屏風の数少ない遺例である神護寺所蔵の《山水屏風》(鎌倉時代初期)を、詳細に検証した上で、和歌に詠まれた主題とが題として選ばれた景物との相関を実証的に示した。一方、盛んに屏風歌が制作されていたのと同時代の作例として、11世紀後半に制作された京都国立博物館蔵(教王護国寺旧蔵)の《山水屏風》を、唐絵屏風ではあるものの現存最古の屏風絵として比較資料に取り上げ、主題としての景物表現が唐絵においても様式・技法の上ではしだいに日本化がすすめられていったことを示しながら、屏風歌制作の背景を論証した。発表者自身が実際に撮影した貴重なカラースライドをまじえ、屏風歌制作と同時進行形で行われた絵画制作のプロセスを解明する極めて明確な研究発表であった。

腮尾尚子氏の「戯作の中の絵銭」は、江戸期に流行した古銭収集の流れを受け、収集対象としてばかりでなく護符や記念物として市中に多数出回った「絵銭」を取り上げ、代表的古銭図譜『孔方図鑑』に

表れた種々の作例をもとに、役者絵や黄表紙の挿図などの絵画資料に表れた絵銭のモチーフを分析しながら、こうした俗信の成立背景や成立時期を読み解こうとするものであった。

従来、近世の庶民信仰を戯作や黄表紙などの文学資料から解明する方法論は、民俗史や民俗学的なアプローチとして捉えられがちであったが、腮尾氏は、多くの作例を検証しながら、絵銭に用いられた多様なモチーフを、美術史学的な分析によってイメージソースを究明しながら、絵銭流行の思想的背景や図柄の隠喩的意味の変化を検証した。単に国文学の絵本研究というジャンルを越えた、歴史学・考古学・民俗学・美術史学など極めて学際的かつ複合領域的な新しいアプローチとして注目される発表であった。

谷口幸代氏の「川端文学と古美術」は、近代文学を作家と関わりのあった絵画作品から解析するという新しい試みである。

谷口氏は、川端個人の美術的嗜好を解明するため、作家の日記や書簡などの文献資料を詳細に検討すると共に、彼と交流のあった鎌倉在住の文化人との交わりで実際に川端が接した美術作品を分析し、個々の文学作品の制作時期と特定の絵画・工芸作品とがどのような相関を示すかを、『伊豆の踊り子』、『千羽鶴』を例に検証した。戦前から戦中という動乱期にあつて川端の嗜好した日本古美術、特に好んだ琳派の絵画作品は、彼の強い希望で初版の装丁にも用いられているほどであったことが示され、彼の目指した日本の美意識を知り、第2次世界大戦後の川端文学の傾向を読み解く手懸かりとしても、興味深い発表であったといえよう。

これらの発表を通じ、南アジアの仏教美術史学を専攻する司会者にとってはいささか手に負いかねるテーマもあり、議論がうまく展開しなかった恨みもある。また、参加者の多くも日本文学・日本史学の研究者で、質疑はもっぱら国文学的視点によるものであった。議論の中に美術史学からの討議がなかったのも残念であった。

今後の展望として、日本絵画史を専門とする研究者を国際日本学のスタッフに加えることより、文学と美術という両面からのアプローチが、日本文学・日本史学・日本美術史学という枠を越えた、より幅広い研究分野の研究者が参加出来る学問領域となる可能性があることを指摘しておきたい。